

Title	経済史研究に就いて (四)
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.10 (1921. 10) ,p.1378(118)- 1389(129)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19211001-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あるが故にマルクスの就ては其の機會に譲りたいと思ふ。大正十年九月十一日稿了

經濟史研究に就いて(四)

野村兼太郎

九

唯物史觀に就いて論ずるに當つて、先づシュタムラーの論文「唯物史觀」を紹介することは必ずしも無用なことではあるまいと思ふ。シュタムラーは最初に先づ此の學說の大要を説明して居る。

「一、人類社會の基礎。歴史の唯物的觀察は次の如き命題から出發する。即ち生産及び生産に次いで其の生産物の交換とがすべての社會秩序の根本であると云ふこと。歴史的に進歩する各社會に於いて、生産物の分配及びそれと共に階級若しくは階段に於ける社會組織は何を生産

變更するならば、必然直ちに問題となる社會の規定されたる形式は變化を生じなければならぬ。

「此の點から唯物史觀は人類の歴史に於いて制定される社會生活の合法性を生ずる。それと共に常に發展史の見地が把持される。社會的秩序の經濟的土臺は決して一定不動の状態として理解されない。却つて絶えざる流に於いて理解される。是等の運動は自然科學的方法に於いて追求され認められる。同様に一般に社會變化の必然的經過を生じ、又同じく歴史的觀察に於いても又近き將來の考察に於いても社會經濟的發展の確實なる傾向を豫想するやうになる。

「故に社會生活に於いて經濟現象は外的現象に適應する。社會經濟的現象は社會的唯物主義に従へば自然的形成物である。是等は發生し動き且つ變化し没落する。——すべて自然科學的に

し、如何に生産し、又産物を如何に分配するかと云ふことに適應することから出發する。

「人類は是に依れば社會的本能を有する生物である。其の同類と永續的社交性に動かされる衝動を具へて居る。——此の社會的衝動に従ふことは更に生存競争に適應することになる。

「故にすべての社會觀察は終局に於いて社會經濟の種類に這入る。人類のすべての社會的存在の定れる根柢は彼等の生活の一般的生産である。すべての社會的變化の最後の原因は其の時代の經濟の中に求められる。

「就中ある國民の法律は、此の學說に従へば經濟的關係の特殊に依つて條件づけられる。それは社會經濟的生產方法に依存する。社會的經濟は實際的現實の社會生活であり、又法律的及び政治的上層構造を築上げる根柢を形成する。若しも此の社會經濟の根柢が其の種類を本質的に

研究すべき過程である。全體に於いて是等は人類の社會存在の資料である。人類の生活と經過とに於いて是は其の運動を説明する。故に社會生活の科學的觀察は結局に於いて常に經濟的現象の合法的研究に歸せなければならぬ。

「二、經濟的關係の反射としての社會觀念。吾人は恰も社會的唯物主義が社會發展の重要な起源として獨占的に『物質的』動因を採り、之に反して理想的要因が人類の歴史の過程に於いて最大の利害及び有力なる作用たることを否認若しくは看過するかのような迷誤に屢々出會する。是は一の根據なき臆説である。

「唯物史觀は廣義に於ける『觀念』の従ふべき意義を認めないのではない。人類の表象及び努力に於いて理想的目的の現出を否認するものでもなく、又斯くの如き觀念が屢々歴史的に現在の法律變化に對して重要な理由であり、又常に理

由となつた事實を無視するものではない。然し唯物史觀は人類の表象が善惡を超越して、それ自身の爲めに第二の確實なる世界に於いて獨立の存在を有し、それと共に第二の分離せる因果關係に獨自の發展を有することに就いては一致する。又時々追求する理想的目的は社會運動の最後の原因ではなくして、それ自體は一定の社會經濟の反照として生ずることを唯物史觀は主張する。

「故に此の觀察の立場に於いて唯物史觀は二個の原則に分かたれる。

「(1)それは單に二元的經驗である。すべての出來事は同一の時間系統に於いてなされる。而して二個の實際に離れた時間種類(Zeitarten)に於いて質量的に種々の因果連鎖——恐らく物質の爲めのと觀念の爲めの——を進まない。

「それであるから唯物史觀は結局すべての科學

的經驗認識の主旨に簡單に一致して居る。即ち先づ唯物主義の特質を保有する。

「(2)社會生活の爲めの資料(社會經濟)と運動(經濟的現象)とは單に眞實なる且つ起つたものとして觀察され得ること、之に反して社會觀念、表象と希望とは社會的經濟及び其の眞の變化に合法的に依存するてふ意見を挿入する。

「是はすでに人類の歴史の粗雜なる經驗に於いて一瞥される。遊牧の民は土地私有財産の定住せる農民とは正と善とに就いて違つた表象を有する。大商人と小手工業者とも異なる。若しくは狩獵的争闘的獨逸人と資本主義的生産手段の企業家労働者とも相反する。

「(3)に於いて人類の歴史の觀念的要素は動ける過程の隣接せる原因であるが、經濟的現象の最後に於いて従ふべき法則に依存するとするならば、唯物史觀の重要な代表との此の關係を

屢々一般的精神現象は人類の歴史に於ける經濟的關係の反射的摸寫に過ぎないと云ふことに依つて説明する。それは經濟現象の反射作用であり、社會經濟状態の眞實在の映象である。存在したる又來たりつゝある社會の實際的發展に此の形式を十分に用ひると、人類の社會生活に際し進歩的觀察は出來る丈け正しく後者の合法的種類に導くことは出來ず、却つて是等はすでに書かれたる人類の歴史が回顧さるところでは經濟的現象の流出物としての階級争闘に依つて定められる。

「三、唯物史觀の科學的意義。こゝに述べたる制度の創設者はカアル・マルクスである。彼はヘーゲル學派から出た。近頃彼及び彼の學説がヘーゲルよりカントに依存すると主張されるが、是は現在の文獻的事實に一致するものではない。マルクスは元來ヘーゲルに依つて實施さ

れた哲學的方法の追従者である。彼は鋭敏なる研究に於いて、獨自の思索を以つて自由に形成し、彼自身の根本の社會哲學(時間的に第一に其の名稱を使用した)を創設した。吾人がそれに就いて他のものゝ影響を觀察し得るならば、カントの超越的哲學から發するものでなく、寧ろ自然科學的發生論の方法に基くものである。然し乍ら吾人は又慎重に評價しなければならぬ。マルクスは「の創造的精神であつた。彼が常に激勵を得しところに、獨自の思索に於いて是等を推敲し、新しきものを形成した。彼は歴史に於いて流轉せる人類の社會生活を調理する彼自身の根本的問題として唯物史觀を創造した。彼は此の主張の下で一般に始めて社會史の科學的觀察を可能ならしめる根本的方法として是を説明した。若しも彼がヘーゲルの術語を避けるならば、それは唯最早生きて居ない世界を

想起するのみであつた。若しも彼の哲學の文章中に批判主義に一致する點を發見するなら、兩者の傾向が同一目的を明かに見んとする故に過ぎない。即ち何が「一元的に『合法性』であるか」と云ふ問題の克服に一致したのである。

「此の問題に没頭することに於いてマルクスの唯物史觀は結局彼以前の大哲學的思索家の根本的努力を續けるものである。彼は是を其の他に原則の問題を一般に避け始めた一時期に於いてなした。人は是を打すて、全く個人研究に任した。自然科学はそれを危険なしになすを得た。それには確實なる基礎と是認された過去の方法とはすでに明白にされ確實にされた。社會科學に於いては全く違つて居る。そこに自然の認識に關係して居る社會生活の合法的經過が存して居ることは尙ほ十分に確實にされなかつた。若しも吾人がそれを問題として離して書いたならば

一層疑はしい。それは出来るだけ多くの個々の材料を蒐集し、是を數十年間作成することに科學的努力の主たる任務が存すると主張する學者を生じた。然し乍ら此の解釋も尙ほ此の個々の研究が其の主張する資格を證明する原則及びそれを進行せんとする方法を暗に假定して居る。此の學者の避け難い困難を始終増加する度合で歴史家、經濟學者、及び法律家は如何しても更に彼等の科學的活動の根本に關して相偶した知識、意見の發表に進めて行つた。然し乍ら此の深遠な問題をさう偶然に完成することは出来ない。精神的研究の鋭き集中を必要とする。

「唯物史觀は此の際此の欠陥を補つた。唯物史觀は社會生活の合法性に批判的自覺を向けた最初の學說であつた。これ科學の歴史に於ける其の地位である。

於いて先驅者を有たなかつたかと云ふことに就いて明示される。法律の形成が根本的經濟に依つて決められると云ふが如く、經濟生活の特質が觀念及び思想に又藝術及び科學の出發點に強き影響がなければならぬことは偶然にも彼以前にすでに強調された。

「然し乍ら斯くの如き狭い觀察に於いては唯物史觀を一の社會哲學として取扱はなかつた。彼の原理には一般の合法性に關する必要なる思索及び社會歴史的事件を理解するに無條件の一元的方法とが存して居る。此の一元に向ふ努力、即ち社會科學的認識の全體の方向は一般に、經濟要因が歴史に於いて相當大なる影響があつたやうに思はるゝことに少しも論及しないで、唯物史觀を表明することであつた。

「唯物史觀の完成は一八四〇年代であつた。マルクスは最初其の一八四五―六年の公にしな

つた(今は滅してしまつた)原稿に又エンゲルスとの共著に於いて唯物史觀を確定した。マルクスは決して彼の社會哲學の十分なる論辯、系統的説明を公にしなかつた。彼はこゝに問題となる思想を最も徹底的に經濟學批判の序文に於いて、次いでブルードンに對する反駁及び小論文にそこゝに論じた。「資本論」は今日の經濟秩序を分析したもので根本的社會哲學の演繹を給するものではないが、極めて僅に社會唯物主義の原則的論辯を發見する。

「かなり後になつて新學說は廣く傳播された。此の事は主としてフリードリッヒ・エンゲルスの行動に依つて生じた。就中彼は唯物史觀の思想をデュロリングに對する論争文(一八七八年)及び他の諸論文に於いて繰返して論じて居る。彼の説明は社會唯物主義の原則の復寫である。今日の論考の最初の手引に使はれる。

「是等兩著者の後に此の問題に就いて如何なる著作及び論文に於いて教へられ得るか云ふことは常に此の論辯の根底を注意する。

「四、近世獨逸社會主義。唯物史觀の見地から人類の歴史を科學的に了解しやうと多くの研究がなされた。確に偏愛的に此の傾向の學徒は文明の始源に適用し、家族、私有財産及び國家の發達に關し今日の意味に於いて明瞭なる概念を與へんと企てた。然し乍ら彼等は其の根本的方法を今日にも又他の過去の時代にも適用した。即ち古代の發展及び起源、農民戰爭に其の端を發した中世最初に於ける運動、佛蘭西革命は自由、平等、博愛等の理想の勝利のみでなく、其の根本に於いて當時の生産方法の發展に依つて必要となつた變革である。即ち封建的秩序の相互の人格的結合と相容れなかつたやうに地方的州縣的特權と相容れなかつたからである。

「すべて是等は其の科學的傾向を現在及び近き將來の社會狀態に試みた個別的の使用、即ち現在の獨逸社會主義より重要ではない。それ自身すでに科學的社會主義と稱し、それを以つて、唯物史觀の社會哲學に依存する自然科學的方法に依つて基礎づけられて居ると思つて居る。

「從つて次ぎの如き思想の順序から出發する。
「(1) 新時代の社會經濟は大部分すでに社會化され、又常に益々社會化される。即ち生産は秩序ある組織的の經濟單位(工場、大農業、大商業等)に於いて生じ、人々は其の中で共同的勞働に結合される。此の經濟單位は絶えずそれ自身膨脹し、同時に數に於いて減少する。それにも拘らず生産の道具が勞働者に屬して居ることに基いて居る、從つて彼等に生産物を定めるところの古い法律秩序が尙ほ存して居る。そこで上述の經濟的根本とそれに関して不確定な法律と

の間に社會的争闘が生ずる。此の争闘は工業及び商業の危機に於いて明確に現れる。此の際唯物史觀の一般的法則に傳承する法律秩序は従はなければならぬ。生産手段の私有は異なる社會經濟には最早や許されない。それは經濟的に廢せられる。

「今日の生産方法は無制限に發展する傾向を有する。自然法的急進力として増加力がその中に存して居る。之に反して生産の一般的無制限の増加が個々の企業家の私有財産と全然反するならば、それを妨害し、計り難い増加を生ずる社會經濟的生產の傾向と、生産の制限を欲せねばならない現在の私有財産的秩序の傾向と一致することは不可能になつたのである。

「經濟的現象は唯物史觀に従へば自然であるが、法律的規則はそれに伴ふ人類の補助手段である。それは發展の他の經過を採つた後には古

代に於いて見る如く一の技術的に不適當の手段として離さるべきである。

「(2) 現代經濟現象の合法的本質は熟考されたる目的に對して多數の秩序的共同作用であるが、それは世界市場に於ける無政府の下の争闘に依つて生ずる。個々の企業内に於いては生産の組織的創造及び指導が中心的方法の中に起るが、全體の社會經濟は無目的の方法に於いて行はれて居る。各個々の企業は何が又如何に多くが正しいやうに見えるかと市場に眼を向けて居る。

「更に內的の反對が生じた。即ち勞働資料と勞働力との浪費に於いて現れたものである。經濟的生產の全體は其の無政府的狀態に依つて其の活動を妨げられて居るが、其の間に確實に擴大する刺激を自然法的に實行するだらう。全體としての社會的生產方法の無政府の有様は吾人の

經濟的關係の發展の自然必然的結果として中止しなければならぬと云ふことはマルクス主義者の眼には避け難い推定である。

「生産の無政府を除去すると云ふのは積極的形式で云へば、社會主義的社會秩序の設立と生産手段の集合と云ふのと同じである。

「五、近世社會主義の批評。唯物史觀の具體的應用として説明するマルクス派社會主義は空想的社會主義と反對に立つ。後者が最も可能なる理想的國家形態を摸範及び努力する價值ある目的として計畫するのに、是は生産手段の集合を如何なる場合にも確實に來たるべき自然的必然として主張する。

「故にマルクスが資本主義的生產方法に於ける其の餘剩價値の學說に依つて其の社會主義を支持するもの、恐らく社會主義國家の建設に依つて企業所得の排斥、餘剩價値なる爲め不道德な

る。即ち社會的生產と資本主義的掠奪との反對、同じく個々の經濟單位に於ける生産組織と社會に於ける生産の無政府との反對である。此の回轉は漸次に壓縮する運動は一の螺旋を現す。其の終極に恰も遊星が中心の集合に依つてする如く到達しなければならぬ。』(エンゲルス)

「吾人が經濟的現象の自然法的存在及び進歩に關する此の思想を明瞭にするならば、大多數の反論は近世社會主義と最早全く相觸れてないことが明である。何故ならそれ等は空想的のものに反對の地位のものであつたから。吾人は生産と分配を合目的方法で國家的中心點から導き出すか如何かに就いて、空想的社會主義に反して、離すことは出來ない。何故ならば唯物史觀は吾人が經濟的現象と名付ける自然的形成物の困難なる進行を吾人に選擇させず、新しい社會秩序に自身を導くと答へる。——若しも吾人が個人

現象の除去に依ると信じて居るならば誤である。マルクスは是等の思想とは甚だ遠いものである。すべての記す價値ある彼の學徒は此のことに就いて決して動搖しなかつた。

「それと共に唯物史觀及び上述せる其の應用は宿命論として考へられてない。吾人は經濟現象の自然法的發展を吾人がそれを科學的に會得するや否や、恰も醫者や技術家がそれを適當にしたやうに、人類の欲望に利用し得ると考へる。然し乍ら如何なる干渉が後に必要であるかと云ふことに就いて彼の學徒は記述を避けて居る。

「未來國」構造の問題は恐らく彼等の爲めに存立しないのだらう。彼等は其の云ふ如く全體に於いて社會化に進みつゝある經濟現象の自然的存在と合法的發展とをのみ主張する。今や經濟現象は不完全なる社會(Society)に這入つてゆく。其の缺陷は二つの上述の反對に依つて與へられ

の行動の自由が偶然に絶滅したことを訴へるなら、それは唯物史觀にとつて無關係である。何故なら社會的唯物主義の見地に從へば社會主義的の社會は必然的のものであつて恰も冬の來た時に冬の爲めに吾人はそれに依つて野原に住居することの制限が『目的』に合はぬものであることを發見するだらう。——而して若しも吾人が社會主義の要求を人間的性質と矛盾するとして表示するならば、マルクス主義者にとつて證明力を有さない。何故なら吾人が其の自然として表示する人間の特質は唯物史觀の學徒には經濟的關係の自然的實體の反映に過ぎないからである。

「從つてすべては次ぎの問題に歸着する。經濟現象は上述の合法性に於いて自然科學的に存在と作用とが増加する自然的形成物であるのか。

「要するに吾人は近世社會主義の批判的判斷の他の方法を度々打開した。經濟現象の自然法的發展は個々に於いてマルクス主義者が説明するのは違つたものであることを示さうと努めた。又吾人は吾人の經濟及び生産方法の本質と傾向とが社會化して居るものであり、此の理由から生産手段の集合は自然必然的でないことを否定した。——是をなす者は社會的マルクス主義の根本思想を正しいものとして取つて居る。「吾人が其の根本學說に一の反對を發見し得る。マルクス主義の方面の政治的活動に對してなされる反對論に就いても同様である。それは經濟現象の運動を進捗するより以上に正確にもあるとは出來ない。其代りに若し生産手段の集合に對する經濟的豫件を自然的發展に於いて尙ほ十分に成長しなかつたならば、政治的權力の獲得になされた努力が成功した場合に狼狽し

なければならぬ。——然し乍らある確信せるマルクス主義者の政治的活動は彼の意味に於いて實際に向つて唯準備的の且つ教育的のものであるに過ぎない。故に此の問題は其の黨派が政治的權力を所有した時によりよく履行し得るだらう。又そこで最後に述べた反對も近世社會主義の原則を動かすには適當ではないのである。そこで吾人は以前に述べた間に戻る。即ちある公共團體の法律上の規則は唯經濟的現象の自然的根據の上の人工的上層構造に過ぎないのか。而して社會秩序の變遷は最後に於いて唯自然必然的の經濟過程に歸せらるべきであるか。」
次にシュタムラーは「マルクス主義の内部に於ける新運動」なる一節を設けベルンシュタインに就いて述べて居るが、こゝには不必要であると思ふから省略して、直ちにシュタムラーの唯物史觀批判を紹介しやうと思ふ。而して是

を補ふに其の主著「經濟と法律」のことに述べるところを以つてし、シュタムラーの學說を批評することに依つて經濟史と唯物史觀、更に人類の歴史中に於ける經濟史の重要を明かにしたいと思ふ。

(註1) Rudolf Stammler の Materialistischen Geschichtsauffassung は Conrads Handwörterbuch 中に寄稿せる小論文ではあるが、此の種の論文中最も要を得たるものであると思ふ。

(註2) Wirtschaft und Recht, nach der materialistischen Geschichtsauffassung, 第二版(一九〇六年)に依る。前述の經濟と法律との關係に關する疑問は此の書及び批判に於いて解決を與へて居る。

(未完)

定に就て (二、完)

水野智彦

第八 爲替換算率制限に關する法案

四月十五日下院通過、五月上旬上院委員會に於て全部削除

大戰以後歐洲諸國宛爲替相場暴落して歐洲よりの輸入品に對する米國の産業戰が著しく不利に傾きたる事は、前節に略述せる所なるも、該法案の論據とする所は主として此點に存するを以て斯に再述せんに。

一、爲替相場と歐洲の物價

開戰以來紙幣の増發、恐慌の來襲、輸出貿易の不振等あらゆる原因累積して、下落に下落せる歐洲宛爲替相場は千九百二十年略ぼ其最低限